

深イ～話！

No.57

——PHP増刊号 1994 年掲載「死は答えである」日野原重明——

私は、昭和 12年に京都大学医学部を卒業して内科医になった。

多くの患者さん、子供、大人、老人の方々を看取^{みと}ってきたが、人間がどう死を迎えるか、その実態に接したときに、その人の生き方の強さや優しさが一番外に現れてくるような気がする。

人間の生き方は、その人の死ぬ場面で一番示されるのではないかと思われるケースに何回か接した。まさに人間は裸で生まれ、裸で死ぬという事実から、死に際して、私たちはその人の真の姿を見ることができるのではないかと思う。

私が医師になってから最初に書いた死亡診断書の病名は、十六歳の女工の少女の、「結核性腹膜炎」であった。昭和12年の夏近い頃だったと思う。京都大学付属病院の真下^{ました}内科の一階の病室、そこには十名ばかりの患者さんが入院していた。

医学部を出たばかりの私は、当時三人くらいの患者の主治医となって、朝夕、担当の患者を診察し、血液や尿の検査をしたり、注射をした。

ただ日曜日だけは、当時私は教会の礼拝に出席し、担当の患者さんに何かことがあれば、当直の医師に処置を頼んでいた。

その少女は不思議に日曜日にはよく高熱が出て、私が日曜日、病室に顔を出さないのを気に病んでいたと、後から同僚の医師に聞かされた。

当時、結核は若い人の死因の一位を占めるほどの難病であり、結核に効く薬は何一つなかった。よほど体力の強い若者なら長期の安静だけで治癒したが、この少女は、いかにも細く痩せ、肺結核は腹膜炎を併発していた。

この少女は、小学校卒業後すぐに滋賀県の繊維工場の女工となり、母親と共に毎日工場に通っていたのである。この母子は共に熱心な仏教信者であった。

家庭が貧しいので、母親は日曜日でも工場に通っていて、めったに病院に見舞いに来られなかった。日曜日には同室の患者さんには家族の方が大勢見舞いに来ていたが、彼女のところには時たま母親が現れるくらいであった。

少女は、家が貧しく、母親が日曜日でも働かなければならないことを知っていて、淋しさに耐えていた。

彼女の容態がみるみる間に悪くなり、痩せ衰えた彼女は危篤状態となった。強い腹痛が起こり、食べない胃から胃液を吐く苦しみが続いた。

急変して血圧が下がった彼女の容態が医局にいた私に看護師から伝えられた。

私は急いで彼女の病床にかけつけた。

彼女は細い声で、脈をとろうとする私の手を握ってこういった。

「先生、どうも長いあいだお世話になりました。日曜日にも先生に来ていただいてすみません。

でも今日は、すっかりくたびれてしまいました。……私は、もうこれで死んでゆくような気がします。

お母さんには会えないと思います。……先生、お母さんには心配をかけつづけて、申し訳なく思っていますので、先生からお母さんに、よろしく伝えてください。」

彼女の言葉に対して、私はただただ彼女を励まし、強心剤を打ち続けて、彼女が先に逝くことへの母親へのお詫びと、親の恩への感謝の言葉を、私から母親に伝えてほしいという健気な努力を押さえつけて、ただ頑張れと、疲労困憊した彼女にさらにムチを連打するような行動をしてしまった。彼女が死を覚悟し、母上へのメッセージを細い声で語り続けようとしていたのに、なぜその時、注射などしないで、彼女の両手を握って、「お母さんにはあなたの最期の言葉を十分に伝えてあげる、安心して成仏しなさい」といえなかったのかと、幾度も幾度も後悔したのである。

十六歳という若さであるのに、貧しい母子家庭の状況を十分理解し、母への感謝の念を最後まで心に秘めて、勇気をもって遺言を私に委ねた彼女。

死と真っ向から対決したその強さと、母への恩返しを果たせずに、母に詫びるその心の優しさ。

この少女の最期の姿の前に、医師としての私は、彼女に比してアンバランスに惨めな自己であることを意識した。

彼女は、死を予知し、死に耐え、母の心に呼びかけて、静かに息をひきとった。

十六歳という若い年齢、小学校を出て女学校にも行けず、女工に青春をかけた彼女。おそらく彼女の優しい資質と、信仰心とが彼女らしい死の受容の姿を見せてくれたように思う。

ドイツの女流詩人のリカルド・フッフはこういう言葉を遺している。

「生は問いであり、死は答えである」と。

彼女の生き方が死に見事に具現されたといってよいと思う。

